

菅野憲司先生を送る

ユーラシア言語文化論講座一同

菅野憲司先生は、昭和62年4月に千葉大学教養部に講師として着任された。教養部、普遍教育において英語教育を担当され、その後助教授に昇任された後、文学部へ配置替えとなった。平成24年に文学部教授となられ、学部及び大学院（文学研究科、人文社会科学研究科、人文公共学府）において、長年にわたり言語学の分野の教育及び研究に従事された。令和3年3月より疾病により休職、令和5年11月逝去された。

菅野憲司先生略歴

- 昭和56年3月 福島大学教育学部中学校教員養成課程英語科卒業
- 昭和56年4月 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科(言語学専攻)入学
- 昭和58年3月 同研究科 文学修士号取得
- 昭和59年9月 同研究科 単位取得済中途退学
- 昭和59年10月 山梨県立女子短期大学講師
- 昭和62年4月 千葉大学講師教養部講師
- 平成1年12月 千葉大学教養部助教授
- 平成6年4月 千葉大学大学院文学研究科担当
- 平成19年4月 千葉大学文学部准教授
- 平成24年4月 千葉大学文学部教授

菅野憲司先生業績一覧

「著書」

『「うそ」の認知科学的研究（その萌芽）』（平成6年度科学研究費補助金（奨励研究（A）萌）研究成果報告書）1995。

『言語研究の軌跡と奇跡に向けて』開拓社。2002。

「論文」

1. 「第50号を迎える『人文研究』に関する覚書：『人文学部紀要』と（人文学部紀要4～13—J/H）とを、中心に」『千葉大学人文研究』50号、2021、pp. 235-244。
2. 「チョムスキーと『チョムスキー』：専門書やテキストとしての田中(1983a)」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』22号、2020、pp. 19-26。
3. 「2020年4月8日から5月31日までの自宅待機」『千葉大学人文公共学研究論集』41号、2020、pp. 167-170。
4. 「二〇一八年度千葉県での『広辞苑』関連講演2件：二〇一九年七月関西言語学会講演資料も添えて」『千葉大学人文公共学研究論集』40号、2020、pp. 71-87。
5. 「故寺村秀夫先生の口癖へのお応えに：「Chomskyが亡くなったら英語学者はどうすんのやろか？」へのお答えで」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』21号、2019、pp. 55-60。
6. 「【模擬講義報告その2】合併銀行名の命名：随機的選択と義務的選択と」『千葉大学人文公共学研究論集』39号、2019、pp. 92-95。
7. 「京大大学教育研究フォーラム15年目：「大学入学共通テスト」英語入学試験は東大に右習い」『千葉大学人文研究』48号、2019、pp. 161-173。
8. 「第25回大学教育研究フォーラムに向けて：個人研究口頭発表と、参加者企画セッションと」『千葉大学人文公共学研究論集』38号、2019、pp. 319-322。
9. 「二字交替漢字語の六分類：日本語・中国語における成果と課題と」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』20号、2018、pp. 299-308。

10. 「和洋・テレフォン・メソッドに向けて：聴覚刺激単独法に基づき、只管静聴に励んで」『和洋女子大学英文学会誌』52号、2018、pp.115-121。
11. 「教育研究ノート 英語ライティング担当29年を振り返る：割当書きコピーの添削から、復習のプリント活用まで」『和洋女子大学英文学会誌』51号、2017、pp.127-151。
12. 「チョムスキーの慶応大学講演について」（富野光太郎と共著）『千葉大学人文社会科学研究』32号、2016、pp.180-190。
13. 「教育研究ノート Subwayか、Undergroundか？：英米語間真逆の真相に挑む」『和洋女子大学英文学会誌』50号、2016、pp.97-100。
14. 「教育研究ノート First Floor：2階か、1階か、それが問題だ」『和洋女子大学英文学会誌』49号、2015、pp.138-145。
15. 「Happy New Yearは、「無冠詞」でなく、ゼロ冠詞である：A Happy New Yearは、文法的に間違いではない」『和洋女子大学英文学会誌』48号、2014、pp.95-99。
16. 「教育研究ノート ReconfirmationⅡ全20回各回5番目全20問の連載：英語における両義性という特徴・特長の興味深さ」『和洋女子大学英文学会誌』47号、2013、pp.113-135。
17. 「『世界言語の人称代名詞とその系譜 人類言語史5万年の足跡』一人称代名詞の遺伝子的背景を探求する先駆的な研究」『千葉大学人文研究』41号、2012、pp.117-124。
18. 「《提言》「迷惑学」から迷惑学へー「己の欲せざる所人に施すなかれ」以下でも以上でもないー」『千葉大学人文社会科学研究』24号、2012、pp.166-171。
19. 「ReconfirmationⅡの20年：英文法の確認と再確認と」『和洋女子大学英文学会誌』46号、2012、pp.148-171。
20. 「合併銀行命名の決定版—義務的選択と、随意的選択と—」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』13号、2011、pp.39-48。
21. 「Reconfirmationの21年—英文法の再確認と確認と」『和洋女子大学英文学会誌』45号、2011、pp.108-129。
22. 「留学生であった卒業生就職支援と修了生共同研究の試み—共同研究、

- 韓国語絶対敬語と日本語相対敬語と一』『千葉大学人文社会科学研究』21号、2010、pp. 385-389。
23. 「合併銀行名は「接点」ではなく「同値」—右側主要部規則ではなく左側優先性原則—』『千葉大学人文研究』39号、2010、pp. 139-149。
 24. 「合併銀行名は、融合学問名と異質で、統合省庁名と反対—「同値」は、「接点」と異質で、内部に変種がある—』『千葉大学ユーラシア言語文化論集』12号、2010、pp. 61-70。
 25. 「無冠詞の独自性一定・不定冠詞の両面性との対比』『和洋女子大学英文学会誌』44号、2010、pp. 70-76。
 26. 「合併銀行名の意味論：三井住友銀行と関東つくば銀行と』『千葉大学人文社会科学研究』19号、2009、pp. 308-314。
 27. 「母語聞き話しは、母語読み書きよりも、直立二足歩行に近い—習得臨界期存在理由を説明することに向けて—』『千葉大学ユーラシア言語文化論集』10号、2008、pp. 43-52。
 28. 「英語IT分裂文の機能：焦点にuntil/tillと否定」（石井敦子と共著）『千葉大学ユーラシア言語文化論集』7号、2004、pp. 1-11。
 29. 「最小限完全化授業」の発想と提案：単位過少習得学生の教え方』『千葉大学人文研究』33号、2004、pp. 219-224。
 30. 「第13回国際応用言語学会議、2002年12月16-21日、シンガポール：Kanno (2002) と会議の話題と』『千葉大学ユーラシア言語文化論集』6号、2003、pp. 49-54。
 31. 「二字交替漢語の六分類とその関係—右側主要部規則と左側優先性原則—』『千葉大学人文研究』千葉大学文学部総務委員会内図書・紀要委員会編32号、2003、pp. 261-274。
 32. 「自然獲得』『千葉大学ユーラシア言語文化論集』5号、2002、pp. 52-58。
 33. 「二字交替漢語における可換性—青緑・緑青と早慶・慶早の意味合い—』『千葉大学人文研究』千葉大学文学部総務委員会内図書・紀要委員会編31号、2002、pp. 239-246。
 34. 「「非母語習得臨界期仮説」：臨界性包含の分類の意味合い』『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4号、2001、pp. 24-30。

35. 「Chomskyの関心・無関心—功績と課題と」『千葉大学人文研究』千葉大学文学部総務委員会内図書・紀要委員会編30号、2001、pp. 161-170。
36. 「第4の言語習得装置とピッカートンのバラ言語：pre-LADの提案とその意味合い」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』3号、2000、pp. 22-29。
37. 「評価合計の提案とその意味合い—「評価差値」の補助としての評価合計」千葉大学人文研究=The journal of humanities / 千葉大学文学部総務委員会内図書・紀要委員会編29号、2000、pp. 239-244。
38. 「言語習得臨界期とブラインド・メソッド「聴覚刺激単独法」の再訪」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』2号、1999、pp. 59-66。
39. 「「評価差値」の提案とその意味合い—理想的教員学生間の相互評価をめざして」『千葉大学人文研究』28号、1999、pp. 151-155。
40. 「ピジンからクレオールへ：ピッカートンとチョムスキーの接点」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』1号、1998、pp. 30-38。
41. 「究極の外国語習得法—ブラインド・メソッド「聴覚刺激単独法」の提案」『千葉大学人文研究』27号、1998、pp. 133-141。
42. 「言語の起源と消滅—言語習得の始点と終点」『千葉大学人文研究』26号、1997、pp. 57-64。
43. 「言語習得における臨界期—言語習得装置の質的变化」『千葉大学人文研究』25号、1996、pp. 135-140。
44. 「「間接目的語」は間接目的なのか？」『千葉大学教養部研究報告B』26号、1993、pp. 191-193。
45. 「第15回国際言語学者会議」『千葉大学教養部研究報告B』25号、1992、pp. 277-279。
46. 「平成2年度英語教育担当教員連合王国派遣に参加して」『千葉大学教養部研究報告B』23号、1990、pp. 467-476。
47. 「3番目の定冠詞を伴う最上級」『和洋女子大学英文学会誌』24、1990、pp. 51-56。
48. 「第9回国際歴史言語学会」『千葉大学教養部研究報告B』22号、1989、pp. 235-237。

49. 「うそを聞くこと、話すこと—うその7つの条件について」『千葉大学教養部研究報告A』22号、1989、pp. 287-294。
50. 「ヤーコブソンの「鏡像関係」の一考察—日本語助詞の習得と喪失を中心に」『千葉大学教養部研究報告A』21号、1988、pp. 165-180。
51. 「発話行為の副詞の両義性について」『千葉大学教養部研究報告B』20号、1987、pp. 197-204。
52. Functional Explanations of Double-nominative Phenomena. 『山梨県立女子短期大学紀要』20号、1987、pp. 13-21。
53. 「英語の最上級と定冠詞の有無—定冠詞の意味的観点から」『千葉大学教養部研究報告A』20号、1987、pp. 153-168。
54. Function Assignment. 『山梨県立女子短期大学紀要』19号、1986、pp. 11-20。
55. 「発話行為の副詞の両義性について」『言語研究』90号、1986、日本言語学会、pp. 234-235。
56. 「英語の間接目的語の一考察：対応する前置詞句と受動文との関連から（第二室、日本英文学第54回報告）『英文学研究』59号2巻、1982、pp. 381-382。
57. 「英語の能動受動態の一検討—エンパシーの観点から」『言語研究』79号、1981、日本言語学会、pp. 121-124。
58. 「関和算の言語学への一検討」『言語研究』77号、1980、日本言語学会、pp. 92-93。